

(2) 副睾丸頭部に於ける副睾丸小管の上皮細胞は、5—7月には顯著な分泌活動を示し、その細胞質中に多量の分泌顆粒を含む。8,9月にはその活動が一時おとろへるが、10,11月には再び活動的となる。冬期に於ける副睾丸の状態は未だ知るを得ない。

(3) 幼若雄に於ては、上記諸部は全く不活動的で、分泌物を含まない。

(4) 4—6月に生殖腺を剔出し、15—75日後に検するに、雄に於ては、これ等諸部分の分泌活動は次第に消失し、約40日後には各部共全く分泌顆粒を缺くに至り、腎小管の構造は次第に雌の夫に類似して来る。雌に於ては、之に反し、何等の變化も示さない。

(5) 睾丸を剔出すると同時にその小片を移植した雄に於ては、腎小管及び副睾丸に於ける分泌活動は55—64日後に於てもなほ維持せられてゐる。但しその活動程度は時に不完全な事もある。移植睾丸片に於ては、造精小管中に造精作用保持せられ、精子をも含む事もあるが、一般に種々の程度の退行變性を示す。間細胞はいづれの場合にも著しく肥厚する。

## 新 著 紹 介

### 北 千 島 生 物 相

(北千島學術調査隊報告)

日本生物地理學會發行

本書は曩に日本生物地理學會から發行せられた「小笠原島生物相」「紅頭嶼生物相」と同様、日本生物地理學會會報(第4卷,第1-4號,昭和8年10-9年2月)に登載せられた論文の合輯である。唯2書と稍趣を異にすることは、本書が昭和6年夏、北千島幌筵・占守・阿頼度3島を踏査した、所謂「北千島學術調査隊」の生物に関する研究報告をなしてゐる點で、卷頭にこの調査の後援者大阪毎日・東京日々兩新聞社取締役會長岡實、大阪毎日西村眞琴兩博士の序文、並にこの調査計畫者の1人岡田彌一郎博士の緒言を添へてある。計畫者の今1人矢部禎吉博士はこの報告の世に出るのを見ずに長逝せられた。

本書を手にして先第一に感嘆するのは、如何に多數の生物がこの調査隊によつて齎されたかといふことである。幌筵島に上陸してより該島を離れるまで、僅か40日あまりの短時日の間に、海陸河湖を問はずあらゆる場所から、廣く動植物に互つてかくも豊富な資料を蒐め、又生態景觀を示すに必要な多數の寫眞を撮影し得たことは、該調査隊員木場一夫・岡田喜一・長谷川傳次郎3氏の努力の如何に並々ならぬものであつたかを物語るものである。西村博士の言の如く、天運は兎に角とするも、眞にその人を得たと言ふべきであらう。第二に本書を見て感謝すべきことは、かやうにして苦心蒐集せられた貴重な資料を速かに精査研究して報文に纏め、この調査隊の活動を眞に意義あらしめ、且光彩を放たしめた各専門權威者の協力である。従來海外諸國が探險隊研究團等を派遣した場合には、その齎した材料は必ず専門家の分擔研究に委ね、その結果は遂次出版するのを常としてゐる。所が本邦ではかやうな方法の行はれたものは比較的尠かつたのであるが、近年各部屬の殆ど總てに互つて本邦學者の手によつて研究し得る

やうになり、本書のやうな纏つた報告書の出版を見るやうになつたのは誠に欣びに堪えない。蓋し短期間の研究隊の報告としては、その内容の完備してゐる點で劃期的のものと言つても過言でなからう。紹介者は茲に調査に従つた3氏の健闘と、蒐集物の研究を分擔せられた各専門家の勞と、更にこの有意義な出版を遂行せられた日本生物地理學會の美舉とに敬意を表し、本邦生物地理學上のこの貴重な文獻を普く世に推奨したいと思ふ。

北千島諸島は本邦版圖の最北最東端に位し、その1つ占守島東岸の小泊埼は實に15 kmの近距離を以てカムチャツカ最南端ロツバカ埼と相對し、その生物相も當然カムチャツカとの深い關係を想はしめる。所が從來北千島生物相は産業上重要な動植物或は高等顯花植物等を除き、極めて不完全に知られてゐたに過ぎなかつた。特に無脊椎動物相の如きは、昆蟲の或部門を除いては殆ど知られてゐなかつたと云つてよい位である。交通の不便と島内旅行の困難とは、長くこの地方を研究者の手から暗黒地帯として残してゐたのである。この事實は本邦版圖の最南端臺灣の生物が、頗るよく調べ上げられてゐるのど著しい對照をなす。従つて本書の出現は本邦北邊の生物相の知識に對する吾々の渴望を充して餘りあるものである。分布境界線等の慎重を要する問題は暫く措き、北千島の生物相が多分に北方系要素を含み、カムチャツカと共通分子が多いといふ豫想は、各部門の研究報告により事實として示されてゐる。吾々は本書によつて北海道以南には見られぬ動物の多くの屬種を知ることが出来る。本報告が本邦北邊生物相闡明に重要な貢獻をなし、將來の研究の礎石をなすことは疑ひを容れない。

本書の收める所、動物學關係の論文19編、人類學考古學關係論文2編、植物學關係論文5編、最初に木場・岡田兩氏の北千島概観と旅行日程とを掲げ、最後に北千島關係の文獻19頁を附す。この文獻表は一般的东西のもの、植物、動物等に分けてあるが、就中動物は從來公表せられた北千島動物相に關する文獻を各専門家が夫々輯製したもので、頗る便利である。本文384頁、13枚の圖版、多數の挿圖の他に、巻頭に千島列島及び北千島の地圖各1葉、北千島を展望する立派な折込寫眞2葉を附す。印刷も立派である。唯惜むらくは索引を缺くことで、これは本書の活用上頗る不便であるが、本文の冒頭にも述べた通り、本書が雑誌に出たものの合綴に過ぎぬもの故、蓋しやむを得なかつたのであらう。菊版、濃藍色クロース装、昭和9年2月、養賢堂發行。定價7圓。

(上野益三)

## 時 報

G. H. PARKER の隱退——Harverd 大學の動物學教室主任の PARKER は1864年の生れて70歳の停年に達するを以て本年教職を辭することになつた。

新“動物學語彙”——ロンドン動物學會の幹事 Dr. P. CHAMBER MITCHELL より下記の通信あり(全譯)。

拜啓 最近數年間分類學者にとり甚だ不都合に感ぜられ候ことは動物學上使用される屬名を掲げたる完全なる語彙のなき事に御座候。Zoological Record に現はれた新屬も1901年より1910年間のものを集録せし Waterhouse's "Index Zoologicus" の最後の巻以來未だ纏めらるるに至らず候。又 Prussian Academy of Science が1926年以來發行を企てつゝある "Nomenclator Animalium Generum et Sub-